

午後3時の海岸線

### プロローグ

誰かに名前を呼ばれた気がした。

浅い眠りから目覚め、紗枝子さえこはうつすらと重いまぶたを開けた。白い制服の上に紺のカーディガンを羽織った、女性看護師の顔がそこにあつた。

「気分はどう？ 高島たかしまさん。そろそろ時間なだけど」

ふっくらとした頬に人のよさそうな笑みを浮かべ、起きてみましょうか……と、彼女は言った。四十代の後半くらいだろうか。今朝からずっと、紗枝子の世話を焼いてくれた人だ。

「はい……」

かすれた声で返事をしてから、紗枝子は目を閉じて、ふうと息を吐いた。それから再び、目を開ける。次第に頭がはつきりしてくる。視線を巡らすと、壁に掛けられた丸い時計が、午後の三時を指していた。手術室からこの病室へ移されて、もう五時間近く経っている。

「ゆっくりでいいわよ」

看護師が手を貸してくれようとしたが、紗枝子は一人でベッドの上に起き上がった。麻酔は切れているはずだが、起きると少しだけ、頭がふらついた。朝から微量の出血が続いていたから、軽い貧血をおこしているのかもしれない。でも体は大丈夫なはずだ。無事手術は終わり、少し休んだら帰っていいと、医師も言っていた。今はどこも痛くない。これなら立てないことはないだろう。

紗枝子は毛布をめくり、ゆっくりと体をひねった。今朝家を出る時に着てきたブラウスとスカートのまま寝かされていた。のろのろした動作でスカートのしわを伸ばすと、看護師が紗枝子のブーツを足元の床に置いてくれた。

「ありがとうございます」

お礼を言っただけでロングブーツに足を滑り込ませ、ファスナーを上げて、ゆっくりと立つてみる。

「大丈夫？ ふらふらしない？」

心配そうな声で、看護師が尋ねる。彼女の目には、自分がよほど頼りなく映っているらしい。

ふとその時、この親切な看護師が、高校生の時に死んだ母に似ていることに気づいた。どこが問われたら上手く言えないのだが、色白で丸顔で、小首をかしげて問いかける仕草が、母の面影に重なるのだ。

ふいに胸の奥に熱いものがこみ上げてくる。今優しくされると、泣いてしまいたいそうだった。

「少し頭が痛いけど、大丈夫です」

本当は疲労感と心細さで、立っているのもやっとだったが、あえてそう返事をした。朝から何度も気遣いの言葉をかけてくれた彼女に、これ以上心配をかけたくなかったのだ。

「ならいいんだけど。それよりあなた、一人で帰るの？」

こんな場合、誰かが付き添うのが普通だと言いたらしい。そういえば事前にもらった説明書にも、そんなことが書いてあった。

——なるべく一人では帰らないこと。

「ええ、そうなんです」

手櫛で髪を整えながら、紗枝子は自嘲気味に答えた。急に現実が紗枝子を襲う。

妊娠八週での流産。その後を受けた、母体の回復のための手術。数日間は出血が続くので、その間は仕事を休み、安静に過ごすように言われた。こんな体では、一人で帰るなどというのも当然のことかもしれない。

それでも一人で帰るしかなかった。妊娠したことも、流産したことも、誰にも話していない。拓也たくやにさえ知らせていない。

知らせたくとも、そんな状況ではなかったのだ。

大学一年から始まり、まもなく十年になろうとする拓也との関係は、もはや出口のないトンネルのようだった。拓也は気ままな性格で、束縛を嫌った。当然のように、独身主義を豪語していた。

「誰かいい男を見つけたら、さっさと結婚しろよ」

たまに会って体を重ねても、きまって最後はこんな言葉で締めくくる。そのくせ、紗枝子が本気で離れようとする、急に態度を変えてきた。

俺のことをわかってくれるのはお前だけだ、お前が必要なんだ……、そう言って再び紗枝子にすぎると。一流企業のエリートを気取ってはいるが、中身は親離れできないマザコン男みたいだ。紗枝子を愛していたのかさえも、今となっては疑わしい。

もはやただの腐れ縁。お互いにとってセックスの相性がいいだけの、便利な相手ではなかった。

紗枝子は女の幸せが結婚だとは思っていなかったが、誰かと家庭を築くことに憧れていた。

母は紗枝子が大人になる前に死んでしまったが、両親の仲は良かった。あの二人のような家庭を築きたいと願っていた。拓也はこんな男だが、いつかは落ち着いて、普通の家庭を築くことを望むようになると信じていた。その時は紗枝子を、生涯のパートナー

に選んでくれるだろうと。

だからわがままも言わず、自分の望みを押し付けることもせず、十年も付き合った。

今から三週間前。

明日から仕事で外国に行くという拓也から、突然別れを切り出された。好きな女性が多かったのだという。

これまでの気まぐれとは違い、彼が本気で自分との仲を清算しがっているのを感じた。

自分は捨てられたのだ。

目の前が真っ暗になり、体から力が抜けていった。あの晩、待ち合わせたバーから、どうやって家に帰り着いたか覚えていない。

現実を受け止められず、紗枝子はそれからの数日を泣き暮らした。自分がいかに無理をしていたか、心がぎすぎすときしんでいたか思い知った。そして紗枝子は、自分が妊娠していることに気づく。

相手はもちろん拓也だ。

勇気を振り絞って産婦人科を受診したものの、すでに日本を離れた拓也に連絡するすべはなかった。悩んで食事も喉を通らない日々が続いた矢先、かすかな出血が起こり病院に駆け込む。

「早期にはよくあることなので、あまり気にしないことです」

医師にそう言われたのが、三日前のことだった。妊娠がわかってから、わずか十日後の流産。誰にも打ち明けられず、紗枝子は一人で心と体の痛みに耐えるしかなかった。

「本当に大丈夫なの？」

もう一度、看護師が尋ねた。優しい声色に、うっかり涙ぐみそうになる。

「全然平気です。表でタクシーを拾いますから」

わざと明るく言ったものの、顔を背けざるを得なかった。紗枝子の気持ちを探したのか、看護師はそれ以上何も言わず、紗枝子の荷物をまとめ、薬の入った袋と次回の予約日の書かれた紙を一緒に渡してくれた。

一週間後に必ず外来を受診すること。その時点で経過が良ければ、仕事に復帰してよいつのことだった。

そのまま彼女は、待合ホールまで付き添ってくれた。

会社からは遠い、総合病院。不妊治療の専門外来があるせいとか、産婦人科は普段から混み合っている。しかし外来診療が終わった今は、院内の混雑は解消されていた。人のまばらなホールで、うっかり知り合いに出くわす心配はなさそうだ。

外の車寄せの端には屋根のついたタクシー乗り場があり、たいていは、数台のタクシ―がとまっている。しかし運悪くその時は、一台もとまっていなかった。

折からの霧雨が、傷ついた体にひしひしと真冬の冷気を押し付けてきた。スウェードのハーフコートの襟をかき寄せ、紗枝子は濡れないようにベンチの中ほどに腰を下ろして、タクシーを待った。やがてあまりの寒さに耐えられなくなり、タクシー会社に電話をしようと携帯を取り出す。そこで、後ろから近づいてくる人の声に気づいた。

「さむーい」

言葉とは裏腹に、浮かれたような若い女の声が出た。まるでこの寒さを楽しんでるみたいに紗枝子には聞こえた。しかし、すぐに男の声が、「ゆっくり歩けよ」とたしなめる。

顔を上げると、グレンチェックのロングコートを着た若い女が、ゆったりとした動作でベンチに腰を下ろすところだった。ほんの一瞬目が合うと、相手はにこっと微笑んだ。自分と同じくくらいの年頃で、明るい色の長い髪をふんわりとカールさせた、可愛らしい女性だ。

つられて紗枝子も会釈を返した。そして気づいた。コートの上からもわかる、彼女のせり出したお腹に。

自分とは反対側に立つ、黒のジャケットを着た男性は、おそらく彼女の夫か恋人だろう。もしかしたら帰り際に、産婦人科の外来の前ですれ違ったかもしれない。人の少なくなった廊下で、医師と話し込んでいた二人連れがいたような気がした。

傘で顔が見えないが、男の視線が自分に注がれている気がして、紗枝子は慌てて目をそらした。

自分には関係のない世界、手に入れることのできなかつた温かな空気が二人を包んでいた。あのお腹では、予定日も近いだろう。そう考えただけで、頭痛がぶり返してきた。情けないことだが、彼女がそばにいること自体が苦痛に感じられ、耳を塞ぎたくなつた。どうかしてる。この先妊婦を見るたび、頭痛を起すのだろうか。

ようやくタクシーが一台、ロータリーに進入してきた。

良かった、帰れる……。とっさにそう思ったが、寒い戸外でお腹をさす隣の女性に目が行った。紗枝子の前でタクシーがとまり、ドアが開いた。立ち上がると、紗枝子は女性のほうを振り向いた。

「どうぞ」

「え？」

「寒いですから、お先にどうぞ」

きよとんとする女にわかるように、ドアの内部を手で示す。

「でも、それじゃあ、あなたが……」

女が言った。可愛らしい声だ。やり取りに気づいた連れの男が、歩み寄ってくる。紗枝子は手を上げて相手を制すと、男とは目を合わせずに後ずさつた。

「わたしは急がないからいいんです。それより奥さんと、お腹の赤ちゃんを大事にしてあげてください」

そう言い残して、雨の歩道に踏み出した。傘を広げ、病院の前をまっすぐ進み、大通りに出る。横断歩道を渡る頃には、寒さとめまいで倒れそうなほどだった。

何もあの場を離れることはなかった。けれど自分がいたら、いつまでもあの二人はタクシーに乗らなかつただろう。諦めよう、悔いても仕方ない。それに自分の強がり、彼女と彼女のお腹に宿つた小さな命のためになつたのだとしたら、それもいいではないか。

すぐに大型ショッピングセンターの脇に出た。その向かいは道路に沿って松林が広がり、海岸が近いことを教えてくれる。ショッピングセンターの玄関前には、客待ちのタクシーの列が見えた。

やつとの思いでタクシーに乗った頃には、体が冷え切り、歯がカチカチと音を立てていた。

自宅の住所を告げ、暖かな後部シートに体を沈めた。車は順調に走り出したが、ほどなくして、長い橋の上でスピードを落とす。雨で道が混んでいるのだろう。

橋の手すりの向こうには、冷たい冬の海が広がっていた。低く垂れこめた雲と同じ、灰色の水面。沖にすすむにつれ、霧がかかったように白くかすんでいた。

空っぽになったお腹に手を当ててみる。妊娠など望んでいなかった。優柔不断な拓也に決心をさせようと、毘を仕掛けたわけでもない。

避妊には十分に注意を払っていた。今回のことは本当に運が悪かったとしか言いようがない。

それに妊娠初期の流産は、胎児側に原因がある場合がほとんどだと医師が説明してくれた。

それでも自分がいけなかったのだと、紗枝子は自らを責めた。小さな命を失くした罪は、心に重くのしかかってくる。

妊娠を知った時は驚き慌てたが、拓也がいなくても、一人で育てるという選択肢もあったのだ。真面目に働いて、経済的にも自立しているのだから。今の紗枝子には、自分の心の迷いと弱さが、流産を引き起こしたように思えてならなかった。

ふと、優しい看護師の笑顔が思い浮かぶ。それが死んだ母の顔にすり替わった。小学生の頃、ここから少し南に下った海岸に、母と一緒に海水浴に行ったのを覚えている。父も姉も一緒だった。あれから十年以上が過ぎた。

姉と違い、いつまでも身を固めない末の娘を、母は嘆いているだろうか。自分の身に降りかかった、この予期せぬ出来事を知ったらなんと言うだろう。

——ごめんなさい、お母さん。

涙が頬を伝って落ちた。

顔を背け、唇を噛みしめながら、紗枝子は自分を責め続けた。さらに明日から、一週間も休まなくてはならない。上司や職場の仲間は何と説明したらいいか。

それを思うと、ますます心が重くなるのだった。

## 第一章 さくら

二か月後。四月。

——この会社にはどうしてこんなに、桜の木が多いのだろう。

高島紗枝子は歩道を急ぐ歩みを緩めて、右手に立ち並ぶ、満開の桜の木々を見上げた。青い空を背景に、しなやかに伸びた枝が薄桃色の花びらで埋め尽くされている。別館と資材管理棟の間に作られた緑地帯には、松やその他の常緑樹に混じって、見事な枝ぶりの桜の木が連なって植えられていた。

紗枝子の職場のある別館や、事業所の中核である本館からも、美しい桜の景観が楽しめた。

いや、ここだけではない。所内には至るところに緑が配置され、そのほとんどに桜の木が植えられていた。ことに事業所の東側を走る国道沿いの緑地には、この時期見事な桜並木が出来る。

それを目当てに近所の幼稚園の子供たちが、毎年花見にやってくるほどだ。

華やかで美しい桃色の花の群れは、束の間、仕事で疲れた心を癒してくれるようだった。

紗枝子の勤務するKY製鉄は、国内大手の一つに数えられる鉄鋼メーカーだ。東京に本社を構え、製鉄所や製造所を各地に所有し、海外も含めた主要都市に、たくさんの支店や営業所を有していた。

社員数は国内在籍者だけでも一万人を超え、世界有数の粗鋼生産量を誇っている。中でも東京湾の東側に位置する、房総半島の葉浦事業所は、KY製鉄の主力製品を製造している。

東京湾を埋め立てて造られた広い敷地内には、縦横無尽に道路が走り、ところどころ鉄さびに覆われた鉛色の高炉や、ダイナミックな工程が繰り返られる圧延工場、様々な鉄鋼製品を生み出すラインなどが配置されている。その間にぼつりぼつりと、赤と白に塗り分けられた煙突が顔を出し、のどかに水蒸気を吐き出していた。

現場と呼ばれる生産ラインは二十四時間体制で稼働しており、ここを受け持つ社員も交代制で勤務についている。

事業所の玄関口にあたる正門付近には、オフィス棟や技術研究所、健康管理センターや見学センターなどが配置され、関連企業の事務所もこの付近に集中していた。

所内では男性社員のほとんどが作業服にヘルメットを着用し、安全靴を履いた姿で仕事に従事している。それはオフィスで、終日パソコンに向かう仕事の男たちも同じだった。

三年前、二十六歳の時に、都内のオフィスビルから葉浦に移った紗枝子の目には、こ



ういった所内の光景は、やや異質なものに映った。

もともと紗枝子は北斗工業という、北海道に拠点を置く、中堅の鉄鋼メーカーの社員だった。北斗工業は本社も製造拠点も北海道内にあったが、東京と大阪に営業所を設けており、紗枝子は東京営業所で国内向けの営業事務に就いていた。

しかし業界再編成の波に吞まれ、会社はKY製鉄に吸収合併されてしまう。

北海道の本社と工場はそのまま残され、全社員の雇用が継続された。ただし「北斗」の名は消え、「KY製鉄北日本製造所」という呼称に変わる。

東京と大阪の営業所は閉鎖され、営業や事務職についていた社員の半数はKY製鉄またはその関連会社に移籍となった。そして残る半数は、自主退職という名の解雇となる。紗枝子は幸運な半数の人間に入れたのだ。

そしておそらく実家が葉浦市だったせいで、ここ、KY製鉄葉浦事業所のシステム部に配属されることになった。

が、しかし。

もとからこの業界にいたにもかかわらず、あいさつ代わりに聞こえてくる「ご安全に」という言葉を聞き、西日を受けて空に浮かび上がる高炉のシルエットを見るたび、都を追われた没落貴族のような気分になった。

四年制の大学を出て、事務仕事ではあったが、それなりに責任のある仕事を任されて

いたのに、葉浦に来てからは庶務業務が中心になった。

ただそれは仕方のないことかもしれないと、今なら思う。

北斗工業とKY製鉄では会社の規模が違いすぎる。社員の数も桁違いだ。だから葉浦の総務部だけでもいくつかのグループにわかれ、一般職の女子社員が多数在籍している。さらにシステム部も含め、製鋼、冷延、熱延といった各部にそれぞれ庶務係が存在していた。プログラミングの経験のない紗枝子が庶務業務をやらされるのは、当然のことだろう。

——工場なんか嫌よねえ。お洒落じゃないし、埃っぽいし。

それは以前、柚木若菜がよく口にした言葉だった。

若菜は、紗枝子がシステム部に來てから親しくなった女性だった。歳は一つ下だったが、KY製鉄では紗枝子より先輩にあたるため、はじめのうちは「柚木さん」と呼んでいた。しかしすぐに意気投合し、お互い下の名前で呼び合う仲になった。

周囲は紗枝子を「北斗から来た人」という目で眺めた。業界では中堅どころの社員が、運よく大手に拾われたと言いたいらしい。スキル面では到底生え抜き社員には及ばないと、見下した態度をとる者もいた。

でも若菜は違った。ただの高島紗枝子として、気の合うお姉さんとして、わけ隔てなく接してくれた。

桜の花びらが、ひらひらと舞っていた。

次の信号を渡ると、本館ビルの前に出る。上司に急ぎの書類を頼まれ、紗枝子は所内のあちこちを回っていた。これから向かう、本館の総務が最後だった。

右に曲がると本館の正面玄関前に入るのだが、ちょうどそのあたりに、桜の木を仰ぐようにして立つ人物がいた。

足が止まりそうになる。

ゆっくりと数歩進み、紗枝子は歩みを止めた。その先にいたのはまだ若い男性で、玄関前の植栽を彩る桜の木を見上げていた。近づくにつれ、その端正な横顔に見惚れそうになる。

折からの風が紗枝子の髪を揺らし、桜の花びらが男の頭上に舞い落ちていった。

彼が見ているのは桜ではないと気づいたのは、さらに数歩近づいてからだった。

エントランス前の車寄せの隣に芝生の広場があり、桜や松が植えられている。それらを背にするように、大きなブロンズ像が建っていた。

戦後間もない頃、この葉浦の地に製鉄所を開設した、KY製鉄創業者の像だ。あと二週間もすると本社で研修を終えた新人たちが葉浦に配属され、この像をバックに記念撮影をする。

そんな光景を、四月のこの時期だけ見ることができなのだ。

まるで時間が止まったみたいだった。

彼を包む、静かで穏やかな空間に目を奪われる。

横顔からでもわかる優しいまなざしで、彼は苔むしたブロンズ像を見上げていた。聞こえてくるのは桜を散らす風の音のみで、それが紗枝子の心を妙にほっとさせる。

けれど突然彼が振り向いたせいで、紗枝子は心臓が跳ね上がりそうなほど驚いた。

男は風で乱れた髪を、手で押さえた。りりしいカーブを描く眉を隠すように、明るい色の髪が無造作に額にかかっていた。

高く通った鼻筋と、すっきりとした顎のラインが、男つばさをかもし出している。けれど大きな目は優しげで、それが彼の整った顔立ちに、子供みたいなあどけなさを漂わせていた。

たぶん、三十歳を過ぎているだろう。そして会社の人間ではない。作業服を着ていないし、この辺では見たことのない顔だから。こんなに目立つ容姿の男がいたら、女子社員の間で噂になるに決まっている。

小さく会釈をすると、紗枝子は黙って彼の前を通り過ぎた。

「あの」

すぐに後ろで声がした。振り返ると、男が小走りに近づいてくるところだった。

「すみません」

急に呼び止めた詫びを述べ、彼は紗枝子の前で立ち止まった。すらりと背が高い。「売店があると聞いたのですが、どう行けばいいのでしょうか」

「売店ですか？」

意外な質問に拍子ぬけする。

「ええ」

男は気さくに微笑んだ。笑うと何だかあどけない。ベージュシックなチャコールグレーのスーツに、抑えた色合いの青とグレーのストライプのネクタイを結んでいる。

オジサン臭さは漂っていないが、かといって華やかなコーディネートでもない。

「この建物の裏側になります」

紗枝子は書類の入った封筒を左手で抱え、右手で本館の裏側に回る道を指差した。

——やっぱり会社の人間じゃないんだ。

「そこを曲がって道なりに進んで……」

言っではみたものの、すぐに右手を下ろす。

「いえ、ご案内します。すぐそこですから」

「いいんですか？」

「ええ。通り道ですから」

総務はここの一階にあり、裏側にも入口がある。別に遠回りにはならない。

男はにっこり笑って礼を言うと、紗枝子と並んで歩き出した。

「美味しいチーズケーキがあると聞いたんです」

「プレミアムチーズケーキのことかしら。毎日、昼休みには売り切れちゃうんです」

歩きながら紗枝子は答えた。

事業所内にはいくつかの売店があり、日用品や弁当、菓子などを売っている。なかでも本館裏の売店が先月から売り出したチーズケーキは、目下、所内で大ヒットしていた。

コクがあって美味しいという評判が知れ渡り、離れた事務所にいる女子社員が、わざわざ車で買いに来たりしていた。

「良かった。まだ間に合いますね」

男は腕時計を確認し、楽しそうに呟いた。

甘党なのだろうか。それより、この人は何者なのか？ どこでこんな話を聞いたのだろうか……。むくむくと疑問が湧いてくる。そうこうするうちに、本館の裏手に出ている。「あそこです」

紗枝子は目の前に建つ、古い平屋の建物を指さした。半分が関連企業の事務所で、残り半分が売店になっている。ここからだと言ったと植栽で入口がわかりにくいのが、目の前に、「売店」と書かれた看板が出ている。

「それじゃあ」

相手の返事も待たず、紗枝子は歩き出した。少々素っ気ない気がしないでもないが、この手の見栄えのいい男は、近づく수록なことがない。自分の容姿に陶醉しきった、ナルシストが多いのだ。

拓也もそうだ。見かけはまずまずイイ男だった。そして交際十年という節目に、紗枝子を捨てた。

「ありがとう。高島さん」

驚いて振り返る。慌てて、首から下げた社員証を押さえた。男は紗枝子に向かって大きく手を振り、売店のほうに歩いていった。

「ああいうのも、目の保養っていうのかな」

昼休み。家から持参した弁当を食べながら、紗枝子はぼつりと呟いた。

「いつ、どこで、いくつぐらいの人？」

若菜はすぐに食らいついた。あまりの反応の良さに、思わず笑ってしまう。

「もったいぶらないで教えてよ。男の人の話でしょ？」

ミニトマトを箸でつまんだまま、若菜は反対の手で紗枝子の腕をつついた。今年になってからお弁当を持参するようになった紗枝子を真似て、先週から若菜も自前の弁当を

持つてくるようになっていた。

別館にある、システム部の一階。窓のない小さなミーティングルームでお弁当を食べるのが、このところの二人の日課になっている。

二人はともにシステム部の運用グループに籍を置いていて、普段は女子三人で昼食を取っている。しかしもう一人がこの二週間ほど休みがちで、若菜と二人だけのランチが増えていた。運用グループにはあともう一人、入社二年目の女子がいるが、彼女は同期入社の仲間たちと社員食堂を利用することが多かった。

「お昼のちよっと前かな。本館の前で桜を見た」

「へえー、花見か。それで？」

「売店はどこかって聞かれて、近くまで案内したの」

「売店？」

「うん。プレミアムチーズケーキのを知っててね。変な人なのよ。作業服を着てなかったから、うちの会社の人じゃないと思うんだけど」

好奇心満々な若菜に話して聞かせながら、紗枝子は先ほどの男のことを思い浮かべた。「花びらがこう、ひらひらって頭上から落ちてきて。何ていうか、桜の木をバックにしてね……」

突然若菜は笑い出した。

「桜の花びらを背負って登場？ いやだ、まるでマンガじゃない」

「失礼ね」

「ごめん、ごめん。でも、見たかったな。その人」

「うーん……。でも、若菜のタイプじゃないと思うけど」

心を癒されるような、彼のすがすがしい微笑みが脳裏に浮かぶ。

快活そうではあったが、知的な印象のほうが強が残っていた。例えば桜の舞い散る庭園で、ウエッジウッドのカップでお茶を飲みながら、静かに読書にふけるのが似合うような。

でも若菜には、その隣の芝生で犬に向かってフリスビーを投げているような、アクテイブな男のほうが似合うはずだ。

現に去年まで、彼女は会社の野球部に所属している男と付き合っていた。東京六大学の野球部出身で、長身でルックスは抜群に良かったが、挨拶がいつも「ういーっす」とか「あざーっす」とかで始まる、筋肉むきむきな男。

少し単細胞そうだけど、スポーツマンだし悪い奴じゃないだろう……。そう思っていたのに、若菜以外に体の関係にある女が少なくとも二人いた。それがばれると、相手は土下座して謝ったそうだが、若菜はきっぱりそいつと手を切った。

人前では平然としていたが、実際には深く傷ついた若菜が涙にくれていたのを知って

いた。

だから紗枝子はその後の数日間、若菜のやけ酒に付き合った。

「その人のこと、思い出してるでしょ。もう、今度見かけたら絶対に教えてよ」

すねたような声で、若菜が念を押してくる。その手はすでに弁当箱を片づけ始めていた。

「う、うん……。もし、見かけたらね」

昼休みが半分終わろうとしていた。

慌てて自分も片づけに取りかかる。馬鹿みたいだ。ほんのちよつと言葉を交わしただけの、二度と会うこともない男のことをあれこれ想像するなんて。

今は恋愛なんかどうでもいい。面倒なだけだし、傷つくのも嫌だった。

あれから二か月が過ぎたのに、いまだに悪夢から抜け出せずにいた。

二歳上の姉は六年前に県外に嫁ぎ、定年間近の父もまた、転勤で去年から東北に住んでいる。一人で過ごす夜、ふとしたはずみにあの看護師の顔と手術室の様子を思い出すことがあった。分娩台ぶんべんだいに寝かされたまま、怖くて泣いてしまったあの日のことが、今でもリアルに思い浮かぶ。

あんなこと、もうたくさんだ。

少なくとも自分には、もっと時間が必要だ。

「それにしても河本こうもとさん、どうしたんだろうね」

立ち上がった若菜が、誰も座っていない向かいの椅子を見つめる。河本というのが、最近休みがちな同僚だった。歳は紗枝子と同じで、服装もメイクもシンプルを心がける堅実なタイプ。会社を休む理由は単なる私用とのことだが、数日前に出社した時、上司の鈴木課長すずきに呼ばれ、さりげなく注意を受けていたのを聞いてしまった。

「急に辞めたりしないといいけど」

若菜が心配そうにため息をもらす。

「そうね」

これといつて病気のようにもなかったし、トラブルを抱えているわけでもなさそうだった。

ただここ数か月はそわそわと、落ち着きがなかったような気がする。河本が休むと若菜がその仕事を肩代わりしていたから、はやく元どおりになってくれることを紗枝子も願った。

食事のあとは女子トイレで化粧を直し、携帯用のヘアアイロンで髪を巻く。長い髪にはパーマをかけていないので、毎朝ホットカーラーで巻いて出勤し、昼休みにアイロンで手直しする。

身支度が整うと、若菜と連れだつて四階に向かった。これから部長のいる四階で、

一日付けついたちで異動してきた者たちの紹介が行われることになっていた。

別館の一階から四階までを占めるシステム部は、おおまかに運用、開発、保守・管理の三つに仕事が別れ、その中にさらに細かいグループが存在していた。紗枝子たちはコンピュータ室のある一階で仕事につき、システム部長は四階にいる。

若菜が入社した頃は、他部課のオフィスも別館にあったそうだが、ほどなく本館裏に新館が完成し、システム部以外はそちらへ引越した。老朽化いちょうの著しい別館には荷物用エレベーターしかなく、コンピュータ室には専用の空調設備が備わっているが、通常のオフィスの空調は旧式で、特に冷房の効きが悪い。毎年システム部に配属された新人は、小ぎれいな新館と見比べては、己の不運を呪うのだ。

一階のコンピュータ室では、国内大手である山科やまのコンピュータ社製の、大型コンピュータが稼働していた。実際にコンピュータの監視をするのは、「マシンオペレーター」と呼ばれる交代勤務の男性オペレーターで、メーカーから派遣された保守担当のエンジニアも、随時出入りしている。

紗枝子たち女子社員は、他部課から送られてくるデータの管理や、プリントアウトした書類の仕分けのような補助的な作業、そして部全体の庶務業務をやらされていた。

廊下に張り出された人事異動の通知によれば、今月の転入者は男性が二人。

一人は事業所内の他部署から、もう一人は関西の技術研究所からの転入者だ。研究所から来た人物は、葉浦への異動と同時に課長職へ昇進していた。

ぽかぽかとした春の日差しが、四階の通路に差し込んでいた。システム部には山科コンピューターはもちろん、それ以外のソフトウェア開発会社などからも、プログラマーやエンジニアが多数派遣されている。彼らも含めた大勢の人間が各フロアから集まったせいも、室内は半袖でもいくらいに暖かい。

紗枝子は若菜と共にフロアの中ほどに立ち、部長の磯貝の後ろに控える二人の男に注目した。一人はメガネをかけた、中肉中背の男性。髪には白いものが混じっており、作業服のズボンのすそを、編み上げタイプの安全靴の中にたくし込んでいた。

もう一人はグレーのスーツを着た、背の高い男性だった。離れた場所からでもわかる端正な顔立ちに、紗枝子はあっと、声を上げそうになる。ついさっき、売店に案内した男だ。

「エネルギー調整室から来た吉田君と、近畿事業所の技術研究所から来た森川君だ」

マイクを持ったシステム部長の磯貝が、二人をそう紹介した。先に年長の吉田がマイクを受け取り、自己紹介を始める。しかし紗枝子の耳にはちっとも入ってこない。

紗枝子だけではない。この場にいる女子社員ほとんどが、吉田の後方に立つ、スーツ姿の男に目を奪われている気がしてならない。

「技術研究所から参りました、森川です」

吉田からマイクを受け取ると、桜の木の下で出会った男は、朗らかな笑みを浮かべて挨拶した。

「ちよつと素敵ね、あの人。スーツを着てるからかな」

耳元で若菜がささやいても、黙って頷くしかできない。

「あのさあ、もつと何か言うことないの？」

名前と元の所属しか言わなかった男たちに、磯貝がじれったそうな声を上げる。周囲から笑いが起こった。

磯貝は二人に何事か耳打ちし、それから再びマイクを手にした。

「両者ともに独身だそうです。良縁があればすぐにでもと申しておりますので、女性の方々、よろしく願います」

あちこちからため息のような歓声が起こり、続いて拍手がわき起こった。

——信じられない。

一階に戻る途中、紗枝子は胸の中でこの言葉を、十回は繰り返していた。そばで若菜が森川の印象をあれこれ言っていたが、耳に入らない。

まさかシステム部への転入者だとは思わなかった。森川が作業服を着ていなかったのは、とりあえず挨拶をしに来ただけで、本格的に葉浦に赴任するのは一週間ほどあとに

なるからだった。

森川薫（かおる）。それが彼のフルネーム。

席についても、なかなか仕事に集中できない。桜の下で微笑んでいた森川の顔ばかりが浮かんでくる。

一時間が過ぎた頃、諦めて席を立った。コーヒーでも飲んで気合いを入れなおそう。しかしノックと同時にドアが開いて、磯貝部長が現れた。後ろに数人の男性を従えている。その中に、紗枝子を落ち着かなくさせている張本人がいるのを見つけ、慌てて脇に飛びのいた。

「新人君たちに、コンピュータ室を案内したいんだけどね」

二人の転入者と、金田（かねだ）という副部長職の男性を引き連れて入ってきた磯貝は、運用グループの課長である鈴木にそう声をかけた。

廊下の突き当たりにあるコンピュータ室は、専用カードと暗証番号を使った入退室管理を導入しており、運用グループ以外の人間は、勝手に中に入れない。部長といえど例外ではない。

「はいはい、アタシがご案内致しますワ」

鈴木への返事に、二人の新参者はぎょっとした顔をする。無理もない。男にしては小柄でぽっつやり体形、白髪交じりの天然パーマのオジサンが、いきなりオネエ言葉を使っ

たのだから。

よっころしょっと立ち上がった鈴木は、「ついてらっしゃい」と、四人に声をかけた。システム部一筋、勤続年数は三十年近い。よそから赴任してきて部長に収まった磯貝よりも、よほどコンピュータに詳しい。だからここでは誰も、鈴木には逆らえない。

男たちが鈴木に気を取られている間に、紗枝子は急いで廊下へ逃げようとした。しかし遅かった。

「ここで会えて良かった、高島さん」

森川が近寄ってくる。仕方なく顔を上げた紗枝子に、振り返った鈴木と磯貝と、金田副部長の視線が向けられる。かーっと、頬が熱くなった。

「さつきはどうもありがとう。おかげでチーズケーキが買えました。評判どおり美味しかったよ」

上司を待たせているのに、なんて呑気（のんき）な奴だろう。しかし周囲の視線と森川の神々しいほどの視線を同時に受けて、声が出ない。

「来週からこっちに来ますので」

これからよろしくお願いしますと、紗枝子に優しく微笑んだ。それから自分に注目している面々にも会釈（えいせき）をし、森川は磯貝たちの後ろに付き従った。

「まさか、あの人？」



若菜が呆気にとられている。紗枝子は大きく吐息をもらし、頷いた。

——もう、くたくた……

残業に追われ、自宅マンションに帰り着いたのは、夜の八時に近かった。

気のせいかな、普段の残業時より疲れた気がする。

ドアを開けると、真つ暗な空間が紗枝子を迎える。いくら電気代の節約とはいえ、玄関の明かりくらいつけたままにすれば良かったと、後悔した。誰もいない暗い住まいに帰るのは寂しいし、何となく物騒だ。

小さく息を吐くと、紗枝子は明かりのスイッチを押して、靴を脱いだ。廊下を進み、リビングの明かりを点け、バッグをダイニングテーブルの上に置く。洗面所で手を洗ってから、留守電の再生ボタンを押した。

上着を脱ぎながら隣の寝室へ向かうと、電話から姉の純子のやや早口の声 flowed。

「ご飯はきちんと作ってる？ 残業みたいね。またあとでかけるわ」

紗枝子は着替えを中断し、下着姿のままベッドに腰を下ろした。留守電が入ったのは、ほんの数分前だと、電話の音声伝えていた。

父の転勤後、一人暮らしになった紗枝子を心配し、純子は月に一度は必ず電話をかけてよこした。

勤務医をしている夫と、その厳格な両親と同居中の純子にすれば、男やもめの父、博之と独身主義の妹は、「放っておくところくなことにならない」カテゴリーの人間に入るらしい。

偉そうに私生活に口を出したりはしなかったが、食生活や節約術について、電話であれこれ持論を展開するのが好きだった。

紗枝子は姉を嫌いではなかった。だから少々口うるさいとは感じてても、月に一度の姉との長電話を楽しみにしていた。

しかし年明け早々、紗枝子がこのマンションに引っ越してからは、電話のかかってくる回数がやや増えていた。

紗枝子が実家を出て一人暮らしをしたいと言いつ出したのは、去年の秋。父が単身赴任で家を出た直後だった。純子は大反対した。

家があるのに、何故わざわざマンションなど買うのか。

このあたりの条件のいい物件は、中古でも三千万近い値がつく。経済力のある男と結婚するのならまだしも、経済観念がないに等しい紗枝子に、ローンが払えるわけがない。そう主張した。

「それならこの家売って、頭金の足しにしろ」

父は紗枝子の考えに理解を示し、そう提案してくれた。

築三十年を過ぎた家は二束三文だが、土地にはますますの値がつくだろう。売却したお金は姉妹で分けて良いと父は言う。

けれど、母との思い出が残る家を手放すことはしたくなかった。

純子もまた、定年後の父の住まいに残すべきだと、この提案を却下した。当時父には交際の女の影がちらつき、その女とどこか遠くで老後を送るつもりだと、純子は怒り心頭だった。

——別に不倫をしてるわけではないのに。

そう思ったが、その時は姉に逆らわなかった。

結局紗枝子は自分の主張を貫き、実家から車で十五分ほどのこの地区に、瀟洒なマンションを手に入れた。

築五年、十階建てマンションの八階にある東南角部屋、リフォーム済みの3LDKで、カーテンとエアコンと、リビングの家具がついてきた。JRの駅まで歩いて十分からない。二面採光のリビングは明るく開放的で、ベランダからは近くの海浜公園内にあるヨットハーバーが見渡せた。

姉には内緒にしていたが、八百万ほど貯金があった。それを全額はたいて頭金と諸経費に当て、不足分の約二十万を銀行から借り入れた。父にも姉にも、一切の資金援助は受けていない。

引き渡しを迎えたのは十二月も終わる頃。

年末年始で帰省していた父に手伝ってもらい、年明け早々、慌ただしく引越した。けれど紗枝子の予定は大幅に狂う。いつか拓也と暮らそうと思いついたマンションだが、彼がここに足を踏み入れることはなかったからだ。

残ったのは、始まったばかりのローン返済。管理費などを合わせ、月々の支払いはかろうじて給料の三割に抑えたが、無駄遣いのできない生活に追い込まれた。

「最近付き合いいね」

さつきも食事の誘いを断り、若菜にそう言われた。けど仕方ない。

貯金を使い果たした今は、当分節約するしかない。元々派手なOL生活を送っていたわけではないが、それでも会社には手作りの弁当を持参し、飲み会は必要最低限、ネイルやエステ、高級化粧品に手を出すのはボーナスシーズンのみと、決心した。

決算業務中の今は、一週間ほど忙しい。せつせと残業代を稼がなくては。

そこでまたしても森川薫の顔が浮かんだ。

一週間後には、彼も正式に葉浦に赴任しているだろう。自分が彼に惹かれているとは思いたくないが、女として、ついつい目を奪われてしまう男性であることは認める。

『ありがとう、高島さん』

その言葉もまた、いく度となく頭の中にリフレインしていた。静かな部屋に一人いる

と、彼の一言がやけに温かく胸に響いた。

数日間は残業が続いた。

その間、一度も雨が降らず、満開の桜はゆつくりと花びらを散らしていった。

春は足音も立てず、そっとその気配を絶とうとしているかのようだった。

所内の各部署では、本社での研修を終え、間もなく葉浦に配属されるであろう今年の新人たちを迎える準備が整いつつあった。

紗枝子が再び森川を見かけたのは、週が明けてすぐのこと。

森川はこのグループにも所属せず、今年のはじめに発足した、新素材プロジェクトのメンバーに任命された。

昨年秋ごろから社内報で取り上げられるようになった、次世代を見据えた新素材の開発・製品化プラン。しかしその詳細や製品化に向けての具体的なスケジュールは、一般社員にはまだ非公開で、目下のところプロジェクトチームの中だけで、極秘裏に進行しているようだった。

プロジェクトの本部は東京本社に置かれているが、メンバーは各事業所内から選拔され、それぞれに担当業務が割り振られているらしい。

森川が担当する業務内容についても、部内ではマル秘扱いのままだ。

とはいえシステム部に転入してきたわけだし、その新素材とやらの、生産管理システムを開発するための準備だろう……と、部員たちは勝手に推測し合っていた。

その日の午後、四階に向かった紗枝子は、金田副部長のデスクの前に立つ森川の姿を認めた。彼の両脇には、工藤、熊井くまゐという、金田の部下が控えている。

工藤も熊井も三十代前半の男性で、社内LANの管理や新人の教育を担当していた。作業服を着ている森川を見るのは初めてなので、紗枝子は柱の陰からさりげなく彼を眺めた。

意外にも、ベージュの作業服がよく似合っている。痩せているが肩幅は広く、足が長いのかズボンの丈が短いのか、靴下をはいた足首が見えていた。

尻のポケットからは軍手が見出ししているが、それさえも彼を引き立てる、お洒落しゃれなアイテムみたいだ。

美形は何を着ても、美形ということか。

しかし森川に気を取られていたせいで、紗枝子は工藤が近づいてくるのに気づくのが遅れた。

「いよっ！ た・か・し・ま」

馴れ馴れしく名字を呼ばれ、ぞっとなる。工藤なんか、顔も見たくない。

聞こえないふりをして立ち去ろうとしたが、工藤は素早く紗枝子の前に回り込んだ。

「なあ、考えてくれた？」

工藤は顔を近づけてささやいた。明るくカラーリングした髪と顎ひげが、間近に迫る。「何のことですか？」

「今更とほけるなよ。あの時はあんなに乗り気だったのに」

紗枝子は足を止めた。顔を上げると工藤のしたり顔がそこにある。

「金があるんだろ？」

「やめてください。こんなところで」

自称「キャバクラの帝王」。それが工藤のもう一つの顔だった。

葉浦市内のキャバクラを完全制覇し、ほぼ連日、キャバ嬢と店外デートを重ねている。週末ともなれば、都内や関東近郊の有名キャバクラにも繰り出し、給料のほとんどをキャバクラ通いにつき込んでいる――。そう豪語していた。

悔しさと怒りがこみ上げてくる。すべては自分の失言からだ。

あれは二週間前のこと。久しぶりに若菜や後輩の女の子たちと飲みに行ったところ、同じ居酒屋に居合わせたシステム部の男性グループと、合コン状態になってしまった。

そこに工藤もいたのだが、紗枝子は酔った勢いで、隣に座った工藤にうかつな質問をした。

「キャバクラの女の子って、どれくらいお給料もらえるんですか？」

「ピンキリだよ。人気のない子とその店の看板の子とは、天と地ほど差があるぜ」

「どういう人が人気があるんですか？」

「そりゃまあ、可愛いだけじゃなく、甘え上手で男を悦ばすコツを知ってる子だろうな。そういう子はどんどん指名も増えて、その子の取り分も増える」

「コツですか……」

「まさか高島、キャバで働きたいの？」

「違いますよ」

慌てて否定したが遅かった。それなら自分が良い店を紹介すると、工藤は大乗り気になった。以来、顔を合わせればにやにやとすり寄ってくる。

確かにマンションのローンに追われ、必死に家計をやりくりしている。会社に内緒でアルバイトをしようかと、考えたことがなかったわけではない。

しかし社員のアルバイトは禁止されている。しかもキャバクラだ。ばれたらクビは免れないだろう。こんな話、うかつに会社でしてほしくない。

「俺に任せろ。絶対あんたを売れっ子にしてやる。年なんか、関係ねえぞ」

「あれは違うんです。ただの興味本位で聞いただけ」

「遠慮すんなよ。その気になりゃあ、今の年収の五倍くらいは……」

「工藤君」

突然名前を呼ばれ、工藤は慌てて振り返った。

「副部長が呼んでるよ」

森川が立っていた。オフィスの真ん中あたりでは、金田副部長がこちらを向いて手招きしている。

——天の助け。

工藤はすぐに去った。紗枝子はほっとして、急いでその場をあとにした。

「待って、高島さん」

けれど今度は、森川が追ってきた。さっきの話を聞かれたのだろうか。胸の鼓動が速くなる。

「これを本社に送りたいんだけど」

紗枝子の心配をよそに、森川は何もなかったかのように、手にした書類をかざしてみせた。

「本社のどなた宛ですか？」

社内便で送ってほしいのだろう。何も自分に頼まずとも、四階の女の子を使えばいいのに。そうは思ったが、書類を預かろうと手を出した。森川がゆっくり微笑む。

「ありがとう。でも自分でやるよ。メールボックスがどこか教えてほしいんだ」

「ああ、はい」

「JK40KYは今のところ俺一人だから、メールの発送も書類のコピーも全部自分でやらないとね」

「わかりました。少し待ってもらえますか？」

JK40KY。

その得体の知れないコトバが、新素材プロジェクトの正式名称だった。メンバーは今のところ葉浦では森川一人。この通路の先の、北西向きの会議室が専用スペースとしてあてがわれていた。去年も別のプロジェクトがそこを使っていたが、空調の効きが悪いため、夏は暑く冬は寒いと不評だった。

紗枝子は本来の目的であった磯貝部長の決裁をもらうと、すぐに森川のもとに戻った。「一階なんですけど、一緒に行ってもらえますか？」

「もちろん」

機嫌良く返事をして、初めて会った時と同じように、森川は紗枝子と並んで歩き出した。窓側の通路には、今日も暖かな日差しが差し込んでいる。

「いい天気だね」

「そうですね」

「こういう日は、外でお昼を食べたくなるね。システムの人はそうしないの？」  
廊下に出て階段を下りながら、森川が尋ねてくる。

「時々、資材管理棟のそばの緑地で食べる人がいるみたいですよ」

「あの桜が綺麗な場所？」

「はい。公園みたいにベンチが置かれてるんです」

「へえ」

踊り場の窓から外を眺めるようにして、ほんの一瞬森川が歩みを緩めた。うっかり彼にぶつかりそうになり、紗枝子は身をすくませる。綺麗にひげの剃られたすべすべの頬のどほほと、喉仏の浮き上がった首に目が行ってしまう。香水なのか整髪料なのか、さわやかな香りが鼻をくすぐる。

森川はいくつだろう。三十そこそこしか見えないが、課長に昇進したのであれば、もう少し上かもしれない。独身だと紹介されていたが、本当だろうか。

素敵な人なのに。

「でも四階の人のほとんどは、自分の席で食べていたみたいだ」

「みなさん、忙しいんですよ。一階は暇人が多いから、お昼は好きにやっています。鈴木課長なんて、毎日外をジョギングしてからご飯を食べてますよ」

「それはいいね、健康的で」

今度は目が合った。印象的な大きい目で見つめられ、足がもつれそうになる。

森川がそばにいますと、何だか落ち着かない。気をつけなくては。

一階に着くと、紗枝子はメールボックスの場所と集荷時刻を教えてやり、早々に退散しようとした。好奇心旺盛な新参管理職の相手はそろそろ終わりにしてもいいだろう。

彼の面倒なら、同じ四階の女の子が見ればいい。それがスジではないか。

「じゃあ、わたしはこれで」

「ごめん、もう一つだけいいかな」

森川の指が、背を向けた紗枝子の肩に触れた。

「な、なんでしよう……」

「事務用品などは、一階から持ってこいと言われたんだけど」

「ああ……。はい」

事務用品や備品類は、一階の倉庫にある。必要に応じて担当者に鍵を開けてもらい、持ち出すことになっていた。

その担当者とは河本だったが、今日も出社していない。代わりに若菜が倉庫の鍵を管理していた。しかしオフィスを覗くと、その若菜も席にいない。仕方なく紗枝子は鍵を掴み、森川を倉庫に案内した。

「忙しいのにごめんね。高島さんにばかり頼って」

「いえ……」

——どうせ暇だし。

決算の仕事も午前中で一段落した。今日から再び定時に帰れるだろう。倉庫内は薄暗く、所狭しと物が積まれていた。どうもこの男と一緒に落ち着かない。紗枝子は事務用品を探しながら、他愛のない話題を口に始めた。

「課長は関東の出身なんですか？」

「そうだけど、どうして？」

「近畿事業所の技研から来たとおっしゃってましたけど、関西弁じゃないし」

「実家は東京なんだ。大学もね。技研には入社二年目からなんだが、途中アメリカに引っ越ったからか、関西弁には馴染まなかったのかもね」

「アメリカ……」

「そう。留学してたんだ。若手社員を中心に、海外の研究機関や、ビジネススクールに留学させる制度があるんだ。聞いたことない？」

たぶん若手総合職のための、育成プログラムのことだろう。大手だから、こういった人材育成プログラムは充実している。

森川は技術系の社員だから、ビジネススクールに通うより、どこかの研究機関で専門知識を学ぶほうが似合いそうだ。

「すみません、よく知らないもので」

紗枝子は素っ気なく返事した。この男は次代を担う人材として、会社がその将来を囑

望している人物なのだ。自分とは違う。彼の過去にも未来にも、きっと一点の曇りもないのだろう。

「わたしは、北斗から移籍してきたので。葉浦に来て三年経ちましたけど、会社のことについては、まだまだ知らないことが多いんです」

邪魔なコピー用紙を押しつけながら、そう続けた。何となく自虐的に聞こえるが仕方ない。

事実だし。

「そうだったの。じゃあ、北海道から転勤で？」

「いえ、わたしは営業所の勤務でしたから」

「ということは東京かな？ でも色々大変だったね。営業所の人の多くは、退職したと聞いているから」

「それはまあ……。わたしは上司にKY製鉄に行けと言われたんですが、中には最後まで、揉めた人もいました」

当時のことが脳裏に浮かぶ。最後まで退職勧告を受け入れずに、上司とやり合っていた者も多かった。同期入社で、同じ国内営業課にいた小沼美智代もその一人だ。

——どうして紗枝子がKY製鉄の社員になれるわけ？

——営業成績トップのあたしがリストラ要員なのに。

——どんな汚い手を使ったの？ 人事の部長と寝た？ それともうちの部長と？  
みんな、生活がかかっていた。感情的になるのも無理ないとはいえ、美智代の言葉は胸にこたえた。

KY製鉄にはすでに有能な営業社員がたくさん在籍していたわけで、だから営業職よりも、つぶしのきく事務系一般職を採用したのだろう。自分が移籍できたのは、そんな事情のせいだと紗枝子は考えていた。

美智代は突然会社に来なくなり、やがて自力で都内の損保会社に再就職した。逆に部員をふるいにかけていた東堂という営業部長は、再就職先が見つからないまま、わずかな退職金を手に会社を去った。

うわべは円満な合併劇に見えたが、表に出ないドラマや葛藤も多かったのだ。

——もう三年か。

地下鉄を乗り継ぎ、片道一時間かけて通勤していた頃がひどく昔のように思える。いつの間にかKY製鉄の、淡いブルーの女子用事務服が体になじんでしまった。

少し埃っぽい所内を歩くのも平気になった。電話に出ると自然に、「ご安全に」の挨拶が口について出るようになった。

「今は通勤時間が短くなったので助かっています。満員電車に乗らなくて済むし」  
森川が笑った。笑うとえくぼができて、何だか可愛らしい。紗枝子を憐れむような素

振りを見せないのが、むしろありがたかった。

「葉浦に来てどう？ 高島さん」

事務用品を手にしたまま森川が尋ねたが、その位置は肩が触れるくらい近い。

——ちよつと近づきすぎてない？

紗枝子はさり気なく、一歩下がった。誰かが見たら、仕事の話をしているとは思わないだろう。

「どうと言われても、生まれも育ちも葉浦ですから」

「それは失礼。じゃあ今は、自宅から会社に？」

「え、ええ……、そうです」

頬が引きつりそうになる。マンションに引越して早四か月。いまだに会社はもちろん、若菜にも家を出たことは内緒にしている。周囲に知られて、あれこれ詮索されるのが嫌なのだ。

「まあ、適度に忙しくやっています」

「ところで鈴木課長はどんな人？ その、ほら……。少し変わってるでしよう？」

口のきき方がね……と言つて、森川は顎のあたりを手の平でさする。確かに鈴木は普通じゃない。はじめは紗枝子も驚いた。

見かけは五十を過ぎているように見えるが、じつはまだ四十八歳だ。天然パーマ気味



のもつさりした髪は、すでに半分白い。顔はぼつちやりとして目が細く、そのせいでいつも眠たそうな顔に見える。

「一見どこにでもいそうな中年男だが、口を開けばオネエ言葉が飛び出した。自分のことを「アタシ」といい、部下のことは「アンタ」と呼ぶ。

しかし本物のゲイではない。結婚しているし、子供もいる。

「ああいうキャラなんです、あの人は。家に帰れば普通のお父さんだって聞きました」「キャラか。なるほど、少し安心した」

「システムに長いせいとか、部内のことは何でも仕切りたがります。でも根は悪い人ではないと思います」

「ふうん。じゃあ、金田副部长は？」

「金田さんは……」

金田は五十を過ぎたばかりと聞いたが、見かけは鈴木より若い。年のわりに体形がスマートで髪もふさふさと黒く、ブランド物のスーツがよく似合った。詳しくは知らないのだが、取締役の誰かの身内らしく、それを後ろ盾にしてか、鈴木とは違った意味で態度がでかい。

家族は妻と、海外留学中の娘が二人いると聞いた。そのような身でありながら、平気で所内の美人と浮名を流しまくっている。

それだけではない。

金田の仕事は所内のネットワークの管理や新人教育、さらには部内に新製品を売り込みに来る業者の対応などだ。だから所内には顔が知られているし、業者も金田に取り入っておけば仕事がしやすくなる。

いつの頃からか、金田が業者と癒着して賄賂やりべートをせしめていると、まことしやかにささやかれるようになっていた。真偽のほどは定かではないが。

「所内の女性に人気があるみたいですよ。ご本人はあまり、私生活を語らないようですけど」

「そうなんだ。四階で見るとね、毎日いろいろな会社の営業が挨拶に来てるんだよ」

「そういう仕事を担当していらっしやいますから。けど、うっかり近寄らないほうがいいと思います」

リベートどころか、最近では会社の資材の着服や横流しまでしているのではと、信じられないような噂が部長の間でささやかれている。しかし金田の後ろ盾に遠慮してか、真相を追及しようとする動きは出ていない。

「そうか。じゃあ」

紗枝子の沈黙に、触れてはならない何かを察したらしい。森川は話題を変えた。

「じゃあ工藤君は？ しばらくは彼から、プログラミンクのことを教わる予定なんだ」

「あんな人、知りません」

つい、投げやりな言い方になる。やっぱりさっきの会話を聞かれたのかもしれない。

「ごめん。何か気に障ることを言ったかな」

「いいえ。でも、工藤さんには困ってるんです」

「困ってるって、どんなふうに？」

紗枝子は森川の顔を見上げた。何でも聞いてくれそうな優しい目で見つめ返され、うっかり口を滑らせそうになる。落ち着くと、自分自身に言い聞かせた。

「顔を合わせるたびに、いやらしい冗談を言ってくるんです。やめてと言ってるのに、聞いてくれなくて。あれはセクハラです」

「わかった。彼に注意しておくよ」

「え？」

「困ってるんでしょう？ さっきもそんな風だったしね。大丈夫。話は聞いてないから、安心していいよ」

そう言って、再びえくぼを浮かべる。

意外と、頼りになる人かもしれない。そう思った時、背後でドアをノックする音が聞こえた。若菜だった。

「ごめんね」

若菜は森川に会釈をし、紗枝子には両手を合わせて、申し訳ないという仕草をしてみ

せた。

「柚木さんです。彼女がここを管理します。次回からは彼女に頼んでください」

紗枝子は森川に若菜を紹介すると、自分はそそくさと倉庫から出ようとした。

「あたしは代理ですからね」

すれ違いざま、若菜が小声でささやいた。

「どっちでもいいじゃない」

「そういう紗枝子は、どうして顔が赤いのかしらね」

廊下に出て数歩進んでから、後ろを振り返った。

——若菜め。

でもほんの一瞬、胸がときめいてしまった。あの時森川は、自分が困っているのに気づいて工藤に声をかけたのだ。

欠勤が続いていた河本が出社したのは、それから一週間ほどしてからだった。

朝一番で鈴木は、河本をミーティングルームに呼び出した。河本が会社を辞める気であることは、薄々みんな感じとっていた。

何かあったのかと尋ねても曖昧に笑うだけで、河本は欠勤の理由を語ろうとしない。

病気でもなさそうだし、人間関係のトラブルも思いつかないし、とすれば恋人となにか

あつたのではないかと、勘ぐってしまう。  
たとえば恋が終わり、燃え尽きて、人生をリセットしたくなつたとか。その気持ち、わからなくもない。しかし他人に打ち明けるつもりがないのなら、彼女自身で解決し、乗り越えるしかないだろう。

その頃になると森川は、工藤を伴い、頻繁にコンピューター室にやってくるようになった。本人も言っていたが、まずはシステム開発の概要やらプログラミングの基礎やらを学ぶことが先決のようだった。

コンピューター室の中には、洗濯機のような四角い機械がずらっと並んでおり、長く放置されている磁気テープの読み取り装置など、珍しいものも見かけたりする。端末を操作しながら、マシオペレーターに質問もできるし、各システムの概要がわかる仕様書のたぐいを閲覧することもできる。勉強するにはうってつけなのかもしれない。

そのため、日に数回は森川と顔を合わせるようになり、言葉を交わすことも多くなつた。ドアを開けてくれたの、ボールペンを貸してくれたの、俺宛のメールは届いていない？ など。めざとく紗枝子を見つけては、用事を頼んでくる。

ある日の午後、森川は一人で仕様書のファイルと格闘していた。うっかり近くを通つたばかりに紗枝子は彼に見つかり、仕様書のコピーを手伝わされた。

「鈴木課長に許可は得てるから」

そう前置きして、彼はたくさん並ぶ仕様書のファイルの中から、購買システムのファイルを抜き出し、概要やジョブ一覧図などをコピーし始めた。これを参考にプログラミングの勉強をするのだと教えてくれた。

購買システムといえは、所内で使う備品や資材の購買にかかわるシステムだが、プログラムの作成が古く、いまだにコンピューター室の隅に置かれた旧型コンピューターで動いている。

随時修正や改編が行われているようだが、近い将来新しいシステムに移行して、メインで稼働している新型コンピューターで動くようになると、鈴木が言っていたような気がする。どうせ勉強するのなら、メイン機で動いている他のシステムを参考にするほうがいいと思うのだが。

けれど口出しはしないで、森川の好きにさせた。

ファイルの中には、プログラムの追加や修正が行われた仕様書がたくさんあつた。差し替えを忘れた昔の仕様書の中に、紗枝子は鈴木課長と金田副部長の印鑑が押されたページを発見した。

作成日は平成初期。この二人が昔、開発グループにいたと聞いたことはあつたが、まさか購買システムの作成者だったとは。

「いつの間にか、森川課長と仲良しになっちゃいましたね」

コビーを終えて席に戻ると、入社二年目の広瀬カナミという女の子にそう言われる。見かけはギャル風で派手なメイクのカナミだが、気が利くし仕事はよくできる。

「紗枝子って見かけはおとなしそうだから、用事を頼みやすいのよ」  
うふふ……と、若菜が目尻を下げて気持ちの悪い声を上げた。

——もうっ。

好き勝手に言っていればいい。それよりも、あれ以来工藤がキャバクラの件を口になくなったことのほうが、驚きだった。

それどころか工藤は、紗枝子の顔を見るとそそくさと逃げていく。森川がどんな注意を与えたのか知らないが、これだけ効果があるのなら、お礼に雑用の一つや二つ引き受けるのは一向に構わなかった。

ゴールデンウィークが目前に迫ったある日、ついに鈴木本の口から、河本の退職が発表された。ひとまず仕事は、若菜が引き継ぐことになる。

想像していたとはいえ、紗枝子はもちろん、若菜もカナミもシヨックを隠せないでいた。そして同じ日の午後、今度は紗枝子がミーティングルームに呼び出される。

鈴木本がここに部下を呼び出すのは、たいいて部下を叱る時。まともな仕事の打ち合わせには会議室を使うのだ。あまり楽しい話ではないだろうと、紗枝子は気が進まぬまま、

ミーティングルームのドアを開けた。

鈴木本は長机を前にして、腕組みしたまま座っている。

「そこに座ってちょうだい」

眠たそうな目で鈴木本は、向かいの折りたたみ椅子を指した。紗枝子は言われたとおりにする。

「お話って、なんですか？」

「来月から四階に行ってほしいの」

「はい？」

「四階よ。JK40KYの森川ちゃんのお手伝い」

「森川課長の？ わたしがですか？」

「そう、アンタ」

だるそうな上司の返事に紗枝子は戸惑い、腰を浮かせかけた。

「どんなお手伝いをするんでしょうか。わたしはシステムの開発のことも、プログラミングのことも、ほとんどわかりませんが」

「電話番とか、その他細々としたことよ。大丈夫。誰にでもできることだから」  
なるほど。しかし誰にでもできる雑用なら、何故自分が指名されるのだ。

「これはもう、決まったことですか？」

鈴木はこくと頷く。

「消去法で決めていたら、アンタしか残らなかったの」

「消去法って……」

鈴木の話はいつも、途中が省略されてわかりづらい。だがどうやら、森川からの要請ではなさそうだ。言葉の意味を計りかねていると、鈴木は腫れぼったい目を見開き紗枝子を見据えた。

「要するに森川ちゃんがプロジェクトの仕事に専念できるよう、アンタが環境を整えてあげるの。やっぱりね、一人だと大変なんだそうよ」

「そういうことなら……。けど、わたしが担当している仕事はどうすればいいですか？」

「パソコンさえあれば、あっちでもできるでしょ。それ以外のことは残りの二人に割り振るから」

若菜と入社二年目のカナミ。河本の分の仕事も増えるのだし、若菜は大丈夫だろうか。「頭であれこれ考えないの。とにかく森川ちゃんが待ってるから、すぐに四階に行きなさい」

猫でも追っ払うみたいに鈴木は、しっしつと、手を振り払った。仕方なく紗枝子は、その場を辞して四階へと向かう。

第四会議室は北西向き狭い部屋だった。窓からは港湾沿いに立つポートタワーや高

層ビルの先端が見えるが、西日しか当たらない。

開けっ放しのドアから中を覗くと、部屋の中央には平机が四つ、突き合わせた形で配置され、その奥にはホワイトボードと課長用のデスクが置かれていた。

奥のデスクに森川が座り、磯貝部長が平机の椅子に腰かけていた。紗枝子に気づいて森川が席を立ち、近づいてくる。

「来てくれてありがとう、高島さん。話は鈴木課長から聞いている？」

「はい。でも……」

入口で躊躇ちゅうちゆしていると、中に入ると、磯貝の声がかかった。紗枝子が中に入ると、森川がドアを閉めた。

「急で申し訳ないんだが、連休が明け次第、ここで森川君のサポートについてもらいたい。期間は当面の間。夏までかもしれないし、秋までかもしれないし」

紗枝子を自分の向かいに座らせ、磯貝が仔細しじまを説明し始める。森川はその横に立ったまま、磯貝が話すのに任せていた。

「開発の技術的なお手伝いはできませんが、それでよろしいんでしょうか」

「構わないよ。まだそんな段階じゃないからね。プロジェクトが増員されるまで、彼を手伝ってくれたらいいんだ」

鈴木の言ったとおりだとわかり、少し安心した。ちらりと森川を見上げると、指で顎あご

を掻きながら、いつものように微笑んでいる。

——コピーもメールも全部自分でやるって、言ったくせに。

目だけで、そう訴えてみる。

「ただね」

机の上で両手を組んだまま、磯貝は紗枝子をじっと見た。

「JK40KYは今のところ、一般社員には極秘扱いだ。森川君には本社から直接指示が来る。その内容を周囲に知られないように、配慮しなくてはならない。同時に君が知り得たすべての情報も、私と鈴木以外の者に他言してはならない。約束できるかな」

「はい。そういう事情でしたら」

口調は穏やかだが、脅すような視線を向けられる。思ったほど楽な仕事ではないのかもしれない。

「ですが……」

「何だね？」

「そんな責任のある役目、わたしでよろしいのでしょうか？」

意外にも、二人の男は顔を見合わせ、笑い出した。

「品良く謙遜けんそんをするね、君は。この人選に関しては、鈴木の一押しだったよ。私も君なら安心できる。しばらく不自由な思いをさせるかもしれないが、よろしく頼むよ」

磯貝は立ち上がると、ぽかんとした紗枝子に背を向けて、さっさと会議室から出ていった。

「さてと」

二人だけになると、森川は磯貝が座っていた椅子に腰を下ろした。

「連休明けまでに電話をあと一台と、君が使うパソコンを持ってきてくれるよう頼んでいる。他には何を留意しようか？」

紗枝子は、はっとなつて前を向いた。

「いえ、あとは……、自分で用意しますから」

返事が上の空になった。

「君なら安心できる」と言った、磯貝の言葉がよみがえる。多少なりとも自分が評価されているのかと思うと、素直に嬉しくなった。KY製鉄に来て以来、社内で自分の存在価値を見出せずにいたのだから。

「正直に言くと、若い子が来なくてほっとしてる」

「は？」

けれど、その声でいっぺんに正気に返る。森川は右手で頬杖をつき、紗枝子に顔を寄せるように体を前に乗り出した。

「運用グループの女性を連れてこよう、そう、磯貝部長が言い出してね。確か、若い子

がいたのを思い出したんだ」

森川の唇が、悪戯いたずらっぽく上向きのカープを描く。こつちをドキドキさせるような笑みを浮かべ、この男はとんでもなく無神経なことを言う気らしい。

「俺も今年で三十五になるし。学生時代の延長みたいなノリの女の子とは、話を合わせられる自信がなくて」

「わたしが一番、年上だったからですか？ 課長と同じ三十代にリーチで、遠慮や気兼ねがいらぬ歳だからですか？」

「そんな意味じゃないよ。ごめん、失礼なことを言った。まだ二十代の君から見たら、俺なんか相当無神経なオジサンだろうよ」

森川の狼狽ろうばいぶりがおかしくて、紗枝子は怒りを忘れて吹き出した。

落ちて考えておかしければ想像がつきそうなものだった。きゃぴきゃぴしている若い後輩は、森川とは合わないだろう。河本は辞めるし、若菜はその仕事を引き継ぐし、となれば自分しか残らない。

まさに消去法だ。

「君が一番信用が置けると、鈴木課長が推薦したのは本当だよ。年齢がどうこうじゃなく、日頃の仕事ぶりや人事考課を考慮してのことだ。その点は自信を持っていいんだから」  
ひたむきな森川の態度に、ほだされる。同時に鈴木が、自分を信頼した上で推薦して

くれたというのも嬉しかった。何も見ていないような顔をして、部内のことを最も細部まで把握し、部員のために気を配っているのが鈴木なのだ。

運用グループの一員となつてほどなく、紗枝子はそれに気づいた。

この際、消去法でもなんでもいい。子供じゃないんだから、些細ささなことでも一喜一憂するのはやめよう。

「いえ、わたしこそごめんなさい。それより工藤さんのこと、ありがとございました」

「え、ああ」

「あれ以来、廊下で会っても何も言われなくなりました」

「そうか、良かった」

森川は心底嬉しそうに、微笑んだ。

この人の笑顔にはそわそわさせられるけど、同時に心も癒される。独身だということのも、いまだに信じられない。たぶん、大人の関係を続けている恋人がいるに違いない。

それでもしばらくは、彼のために頑張るのもいいかもしれない。もしかしたら、新しい未来が開けるかもしれない、そんな予感がした。

## 第二章 ささやかな野望

ゴールデンウィークは、爽やかな快晴のうちに過ぎていった。

五月の連休中に、姉の純子が一人娘のさやかを連れて泊まりに来た。さやかはこの春、無事お受験を突破して、有名私大の付属幼稚園に入園していた。

純子の子供時代によく似た顔立ちのさやかは、紗枝子のことを「さえちゃん」と呼ぶ。初めて来た叔母のマンションが気に入ったのか、南向きのベランダに飛び出し、八階からの景観を楽しんでいた。

けれど純子のほうは、始まったばかりの幼稚園生活に慣れないからか、それとも夫の両親との同居によるストレスが蓄積しすぎたのか、疲れた気配を隠そうともしなかった。「独りは気楽でいいわよね」

ダイニングで一緒に夕食を囲みながら、純子は放心したように呟いた。十二畳ほどある室内には、買った時についてきた大きなファブリックのソファとダイニングテーブル、あとは小さな液晶テレビと専用のキャビネットくらいしか置いていない。

純子の呟きは、だだっ広い室内に静かにこだまするようだった。

二十五歳で駆け出しの医者と結婚した純子は、三十歳前に第一子を出産、それを機に夫の両親と同居することになり、庭付きの大きな二世帯住宅に移り住んだ。

さやかが小さいうちから情操教育やら習いごとやらに精を出し、無事最初のお受験も突破した。ここまでなら、典型的な人生勝ち組だ。

夫の両親との同居は気苦労が多いだろうが、分不相応なマンションのローンをしよい込んだ自分に比べれば、夫の収入だけで暮らしているなんて恵まれていると言えるだろう。口うるさい姑しゅうごくらい我慢しろと、言いたくなった。

けれど、自分たち姉妹には母がいない。

たった一人の父も、今は遠方に暮らしている。羽を伸ばしに実家に帰ってきてても、自分以外に愚痴を聞いてやれる家族はいないのだ。

そう思い、その晩は遅くまで純子の憂さ晴らしに付き合った。

「あんた本当に、このローン払えるの？」

明け方近く、ようやく布団に入ると純子は言った。そばでさよかの小さな寝息が聞こえた。

「大丈夫よ。頑張って働くから」

やせ我慢して答えると、紗枝子は枕をならべて寝る姉に背を向けた。

今では意地だけが紗枝子を突き動かしていた。ぎりぎりまで頑張って、それでもだめ



なら自己破産でもなんでもしてやる……。そう覚悟を決めていた。純子はマンションに二泊した。最後の日には紗枝子とさやかを連れて実家に行き、庭の草取りをしてから帰っていった。

連休が終わると、四階での仕事がスタートした。

初日の朝、始業の四十分前に第四会議室に行き、まずは机の上の雑巾ぞうじがけから取りかかる。二台のパソコンが置かれた森川の机はきちんと整頓され、重要な資料資料が出しっぱなしということにはなっていなかった。

ごみ捨てや床のモップがけは清掃代行の女性がやってくれるので、あとはキャビネットや窓枠を軽く拭く。

彼が正式に着任して一か月が過ぎようとしているが、その人目を引く容貌とは裏腹に、マニアックな理系技術者だとささやかれるようになっていた。

相変わらずコンピューター室を訪れるのが好きで、慣れてくると工藤やオペレーターへの質問もどんどん増えた。

頭のいい人間ほど、自分の知識とのずれがあると疑問を並べ立てるらしい。

会社には会社独自のシステムがあるわけで、教科書どおりにはいかない。熱心に質問してくるのは結構だが、あいつが来ると仕事にならないと、次第にオペレーターたちは

煙たがり始めた。

そんなことを考えながら、十分ほどで拭き掃除を終える。それを見計らったかのよう  
に、森川が出動してきた。

すっかり見慣れたベージュの作業服に、黒の安全靴という姿。その両手はナイロンの  
シオルダーバッグと、駅前のベーカーリーとスーパースタンドの袋ぶくろで塞がっていた。

「おはよう、高島さん。早いね」

「おはようございます」

ブラウスの袖をまくっている紗枝子に、森川は驚いた顔をする。それは紗枝子も同じ  
だった。始業までまだ三十分ある。たいていの管理職は会議でもない限り、こんなに早  
く来ないだろう。これから毎朝、森川より先に来て掃除を済ませるには、最低でも四十  
分前に来なくてはならないようだ。

「そういえばここに來てから、机の上を拭いた記憶はないな。ありがとう、助かるよ」  
嬉しそうな笑みを浮かべ、森川は自分の席についた。

「課長も早いですね」

「うん。葉浦に來てからは、会社で朝食をとるようにしてるから」

パソコンを起動しながら、彼は机の上に袋の中身を並べ始めた。駅前のベーカーリーで  
人気の焼きたてメロンパンと、クロワッサンサンド。それにテイクアウトの容器に入っ